

ダルクは敗れるべくして敗れた。

ジャンヌ・ダルクの出現によってフランス人に国家を守る国民的自覚が生まれ、そして十九世紀の民族主義勃興でジャンヌ

信仰が高まった。  
第一次世界大戦直後の一九二〇年、彼女が聖者の列に加えられたのも、意味の深いことのようにである。



古田武彦氏の若き日

中嶋 嶺雄

(東京外国語大学教授)

埼玉古墳の鉄剣銘文解説をめぐる最近の歴史学者の論戦を、まったくの素人として遠くから眺めていると、古田武彦氏の情熱的な発言は、相変らず清新な

息吹そのものであって、若き日の氏を回想することなど、まだまだ時機尚早であるのかもしれない。人は氏を反主流の民間史家と語るようであるが、私にとっての古田武彦氏は、人生の出会いの一齣以上の意味をもつ恩師でもある。

このように書くと、古田氏自身は驚くかもしれないが、それには若干の説明が必要であろう。信州・松本に生れ、育った私の母校は、すでに創立百周年を過ぎた松本深志高校であったが、東北大学を卒業したての古田武彦氏は、日本史と国語の教師として、そこに青春を燃やしつつけていたのであった。当時の深志高校には、大学の教師以上に優れた教師と思われる先生方が数多く教壇に立っておられたが、古田氏は、生徒にたいする無鉄砲なまでの思い入れという点で異色であり、生徒たち

は、フルタヤと呼んで兄貴のように親しんでいた。型破りの教師として古田氏と並ぶ双壁は、のちに『中央公論』誌上に映画評論をしばしば執筆されたフランス語の並木康彦先生(現中大教授)であり、私たち生徒を引きつれて教室をエスケープし、近くの城山に登って寝ころびながらの青空授業がおこなわれたりした。

旧制松本中学以来の自治の伝統を誇る深志高校は、一方で教育の尊厳に徹しながらも、このような型破りの教師を許容しつつ、私たちを知的に解放してくれたのであり、並木先生のお蔭で私は高校二年の夏休みに仏文学の最高峰・渡辺一夫氏から小人数でモーパッサンの短篇を講読していただくという特権にも与った。

私自身がのちに講師の末席を継いだとはいえ、私の在学中の

ただけでも歴然とする、君たちはベリア事件をどう考えるのか、という趣旨のことを社研のメンバーに語ったのである。ベリア事件という刺激的な題材を衝かれた生徒たちは、古田先生の指摘が問題の本質に触れているだけに激昂した。

彼らは、古田先生をとりかこんでその「ブチ・ブル性」を激しく批判する。いわば、一種の「大衆団交」のようなかたちになった。

すると古田先生は裸足につっかけた草履をぬぎすて、床に車座になって、この議論を正面から受けてたつたのであるが、まさに尊々と熟っぽく、しかも理路整然と自論を持してゆずらず、このときすでに時流に抗して、スターリン神話に閉ざされた世界への挑戦を試みたのであった。たかが、高校生の展示ぐら

とも思われるであろうし、一般の教師なら、生徒の「偏向」として軽く看過こそ程の事柄でもあろうが、近くで一部始終を見ていた私にとっては、強烈な教師像を心のなかに刻み込まれた場面であった。社研の生徒以外の目撃者は私一人であったような気がする。

のちに大学の教壇に立つことになった私は、十年前の大学紛争における大衆団交で「造反有理」のスローガンに鼓吹された学生たちとの陰惨な団交に立ち向うハメになったが、その偽りの造反原理に動じ得なかった私の立脚点のどこかに、古田先生の想い出が重なっていたのかもしれない。

やがて古田先生が母校をお辞めになって京都へ行かれたとの消息を耳にした私であったが、その後の二十年間、お会いすることはなかった。迂闊にも名著

『とんぼ祭(文化祭)』の講師としては、一年生のときに飯塚浩二氏、二年生のときに朝永振一郎氏、三年生のときに吉川幸次郎氏が来校されたことによっても、当時の雰囲気しのばれよう。

そうしたなかで古田氏の授業は、原典読破主義をたてまえずしながらも、既成の理論や解釈を排した独自のなものであった。甲高い声を喉をしばって発しつつ、度の強い眼鏡のなかの細い目尻を下げ、くしゃくしゃになったハンカチで汗をふきふき講ずる授業は、まさに情熱的であり、しばしばワイシャツがズボンからすっかりはみ出してしまっても、ご本人はその姿態の滑稽さにまったく気づかないのである。

私は、その古田先生が担任のクラスではなかったが、私にとっては忘れ得ない想い出がある。  
『邪馬台国はなかった』(朝日新聞社刊)の著者が、かつての古田武彦先生であったことを知ったのは、卒業二十周年記念のパーティーが母校で開かれる直前になってからである。

一夜、松本へ駆けつけた古田武彦氏は、ファイアー・ストームの火が燃え盛る母校の校庭に私の姿を見つけて話しかけて下さり、私の著作を読んで下さっているとのことであった。その夜は、それぞれに人生の糧を授けて下さった数多くの恩師とともに、校庭の火が燃えつきるまで、私たちは歌い、語り合っていたが、フルタヤも目を赤くして二十年前と同様、私たちと円陣を組んでいた。

だが私は、ここに記した古田先生と私自身との密やかな出会いについてお話しする機会を、ついに逸してしまったのである。